

## 美術研究 第八十二號

二八

の興味を惹かなくはない。即ち父等顔が早く同題の圖を黒田侯の模 國華三二九號に繪

いてゐると共に、彼の子等與も亦比較すべき好作を圓覺寺の鳥鷺圖 美術研究三四號

に示してゐるからである。之を一言にして云へば、等顔のそれは雪梅に頼ふそ

の一群を寫したものととして、寒さに膨らみつゝ寄合ふ姿に鋭い寫實は見られるにせよ、要はその梅幹に見ると同様、筆墨共に勁剛な風氣に終始するものに外

ならないが、之に對すれば此等益畫はより細かな抑揚ある筆意に立脚してゐる事を知ると共に、それだけ一脈の弱さの加はり來つた事は蔽ひ難かるべく、而

して之に更に柔かな暈染をすら添へるに至つた等與畫は、なほ一段の輕さを進めてゐる事は云はずして明かである。茲に斯派三代の畫風の自らの推移の反映があるのみならず、力量の相違も相伴うて顯然たるものがあるかを感じずるが、

それにしても、この鳥の黒々とした野姿は斯派自身のやゝ重苦しい畫法に一味を通ずるかに覺えて、各その專藝としての面白さが見られ、從つて寧ろあまり

に卒氣ない等顔畫に對すればこの等益畫にも別に採るべきものゝある事を賞すべきかも知れぬ。特にこの圖が配景を努めて省いて鳥の姿のかなり大きく寫

してゐるのは、主題とする所の全く茲に在ることを示すものとして、よくその畫法を窺ふべきであらう。唯これが見るが如き押繪貼の形式を取つた連作であ

る點はやゝ異數な感を覺えしめるが、各扇紙繼なく、印章の位置も概ね然るべきを思はせる事から見て、最初から恐らくかゝる種類のものだつたとして置く

他はないかと思ふ。

なほ因に云へばこの等顔以下の數代は何れも本圖に於けるが如き瓢形「雲谷」印を用ひた。その印影は多くは甚だ相似てまた往々異つてゐる。是はこの

時代にかなり多く見られる同型印の數代襲用の例として注意に値すると共に、

それだけその同異には特別な顧慮を要するものと思ふがこの點についてはなほ將來の精査を期し度い。

## 童女像 解説

京都 守屋孝藏氏藏

頭をやゝ垂れ氣味に兩手を脚の上に組合して正坐せる童女の塑像である。小像ながら相好は溫恭にして豐麗、姿體はつゝまじやかなうちに豐美なる趣を現し、且つ寫實の妙を得た所謂奈良朝的要素をもつて包まれたる誠に愛すべき作品である。惜しい哉膝の部分を破損し、着色はほとんど剝落して黃色を帯びた埴土のまゝに近い姿となつてゐる。着色の迹を云はゞ下塗胡粉以外は、衣の右肩部、裙の一部に橙赤系の淡色、右脇下に綠色、頭部、袖に黑色を僅かに見るだけである。

併しこれらの損傷は却つて本像の製作過程を吾々によく知らしめてゐる。内部構造については曾てX線鑑識の例として本誌に掲げられたことがあるが、(本誌七十二號中根氏論文參照) 先づ長さ八・五糎ばかり小判形をした座板に心棒を立て、これに藁を捲き附けその上に荒い埴土をもつて型を造り篋目を入れ、更にその上に紙寸沙を混ぜた埴土を塗り上げ、尙表面に仕上げを施し、胡粉下地の上に彩色を施したものであつて、正に我國古制の塑像の製作工程を明瞭に示した好例である。

本像は以上の如く製作法、様式等から見ても正しく奈良朝のものに相違ないが、なほ傳へて法隆寺五重塔塑像群の一つであつたと云はれてゐる。五重塔塑像は説明するまでもなく資財帳に云ふ和銅四年に造られたものにして、中には新古の修理を経たもの、全く後補のものもあるが、その原作のものに比較した場合、本像が手法、様式に於てこれらと合致するはもとより、大さ衣服に僅少の差はあるが東面及び西面中にほゞこれと同じき童女像を見、今假にこれを東面又は西面中に据ゑるも何ら不自然ではないのである。これらの諸點よりすれ

羅  
漢  
像

東京美術學校藏

ば恐らく所傳の如く、近代の何時の頃かに其處から世上に流出したものと見做して差支ないものと思はれる。たゞ塔内諸像の配置は各本尊を除いては可成交互に入亂れて居る様であるから、之が何れの面に置かれてあつたかは今定め難いが、とにかくその複原に役立つ資料の一とさるべきものであらう。

尙ここに所傳に於ても、製作法、様式に於ても童女像と條件を同じうする塑像を東京美術學校藏品中に見る。之は高さ二一糎ばかり羅漢の啼哭する様を寫せる小像であるが、その寫實の妙は童女像に劣らぬ秀逸なるものにして、着色剝落し、埴土があらはになつてゐる。今塔内に於てこれと類似像のある北面涅槃像土中に之を置くもいささかも不釣合を感じない。即ちこれ又所傳の如く法隆寺塔塑像群の一つと見て難無かるべく、その像形よりして恐らく涅槃像土に置かれて居たものであらうと思ふのである。

たゞ二像の土に多少の差異が窺はれる。即ち童女像はやゝ赤味ある灰色であり、羅漢像はわずかに緑色を帯びた灰色をなしてゐる。併し法隆寺五重塔塑像群も必しも一樣の埴土のみでない事はその調査に當つた人々の所見にも聞くところであつて、この二像の土が塔中の如何なる群と近いかを調べて見るならば、更にこれらの所屬を明瞭にし得ると思ふが未だその機を得てゐない。

# 美術研究所時報

美術懇話會は九月二十九日上野精養軒に於いて開催、川端龍子氏の「北支見聞談」の講演を聞いた。

## 寄贈圖書

佛國寺と石窟庵  
南明寺國寶建造物本堂修理工事報告書

美術研究所時報

朝鮮總督府  
文部省宗教局保存課

國寶興隆寺本堂修理工事報告書

浮世繪界 三ノ九  
史蹟名勝天然紀念物 一三ノ九

白磁 一〇ノ三  
工藝ニュース 七ノ九

國史學 三五  
漆と工藝 四四七

汎工藝 一六ノ八  
道場 二

日本建築士 二三ノ三  
藝術資料 三ノ七

建築雜誌 六四二  
書道 七ノ一〇

美術眼 二ノ一〇  
美術世界 二ノ一〇

書畫骨董雜誌 三六四  
燒もの趣味 四ノ一〇

アトリエ 一五ノ一四  
Pantleon, Vol. 22, No. 8, 9

Bulletin of the Metropolitan Museum of Art, Vol. 33, No. 8  
Berliner Museen, LIX Jahrg., Heft 3

Museum News, No. 83  
The British Museum Quarterly, Vol. 12, No. 3

Honolulu Academy of Arts, Vol. 6, No. 3

文部省宗教局保存課

美之國 一四ノ九  
教育美術 四ノ九

文部時報 六二八—六三一  
國際建築 一四ノ九

藝術日本 四〇  
美術幣 一三ノ九

美術幣 二三四  
美術界 八ノ五

三田評論 四九二  
茶わん 九三

塔影 一四ノ九  
みづゑ 四〇四

史學研究 一〇ノ一  
學校美術 一二ノ一〇

圖畫と手工 二三二  
林泉 四六

國寶 一ノ五